The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語の結果構文における目的語省略の意味・語用論的条件
Author(s)	小薬, 哲哉
Citation	言語文化研究. 2016, 42, p. 85-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56190
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英語の結果構文における目的語省略の意味・語用論的条件 [1)]

小　薬　哲　哉

Semantic and Pragmatic Conditions on Object Omission in the English Resultative Construction

KOGUSURI Tetsuya

Summary: This paper is concerned with object omission in the English Resultative Construction（e.g., *You sweep Ø clean, and I wipe Ø clean*）. Considering missing objects of causative change-of-state verbs such as *break* and *kill*, I propose their licensing conditions and applies them to missing objects in the Resultative Construction. It is shown that two important semantic and discourse-pragmatic factors are related to acceptability of the omission: imperfectivity / atemporality and emphasis on causation of the event denoted by the expression. Also, the paper uncovers an interesting fact that there are two types of Resultative Constructions as to whether they accept missing objects even with the types of contexts that render those of causative change-of-state verbs acceptable, which this paper attempts to explain in terms of a lexico-semantic relationship between the verb and its object.

キーワード：結果構文, 目的語省略, 状態変化

１．はじめに

主語や目的語のような動詞の項（argument）が省略できるかどうかという問題は, 文法研究において注目されてきたトピックの一つである。中でも, 先駆的研究の一つであるFillmore（1986）では, 英語の目的語省略の可能性について, 語用論的, 及び語彙意味論的観点から考察し, 様々な興味深い言語事実を指摘した。その一つとして, break, bend, create, destroy, move, liftのような使役的な状態変化を表す他動詞（causative change of state verb; 以下, 状態変化他動詞）は, その目的語である被動作主項（patient）を省略することができないという事実がある

[1)] 本稿は, The Seventh International Conference On Construction Grammar (2012年 8 月, 於Hankuk University of Foreign Studies), および第 1 回認知・機能言語学研究会 (2015年 6 月, 於大阪大学) での口頭発表の内容を改定したものである。各会の参加者の方々から貴重なご指摘とご助言を賜った。記して感謝申し上げる。また, 本稿での作例の容認性チェックを協力して下さったインフォーマントの方たち, そして貴重なコメントを下さった 2 名の査読者に心より感謝申し上げる。なお, 本研究は, JSPS科研費26884045の助成を受けている。

（Fillmore（1986: 104））[2)]。

（1） * Kelly broke Ø. （Rappaport Hovav and Levin（1998: 102））

しかし, その後の研究で, 適切な言語的及び言語外的文脈があれば, 状態変化他動詞でも目的語省略が可能となるということが明らかとなってきた（Goldberg（2001, 2005）, Mittwoch（2005）など）。

（2） A: Let's get all of these ugly dishes out of here before your date arrives.
B: OK, *you break* Ø and I'll sweep Ø.
C: You *wash* Ø, I'll *dry* Ø. （Goldberg（2001: 513））

（2）で省略された目的語は, 先の発話にあるthese ugly dishesである。breakとsweep, washとdryが対比され, その目的語が省略されている。

一方で, 特に90年代以降注目を集めてきた構文形式に, 結果構文がある。この結果構文も, 状態変化他動詞と同様に, ある事物の状態の変化とその後の結果状態を表すことで知られる。実際, 結果構文の目的語も省略することができない（e.g., Goldberg（1995））。

（3） a. John wiped *（the table）clean.
b. The dog barked *（Mary）awake.

ここで,（2）の事実を踏まえると, 同じ状態変化を表す結果構文も, 適切な文脈があれば, 目的語が省略できると予測される。そこで, 同様の文脈で, 結果構文でも目的語省略が可能かどうかインフォーマント調査を行うと, 興味深い事実が明らかとなった[3)]。文脈があれば容認可能な事例と, たとえ文脈が与えられても容認されない事例が存在するのである。

（4） a. （When cleaning a room）you sweep Ø clean, and I wipe Ø clean.
b. * Bird: Oh my, she won't wake up by any means.
Dog: Well, don't give up. You bite Ø awake, and I bark Ø awake.

管見の限り, 結果構文の目的語省略を詳細に考察した先行研究はなく,（4）のような事実はこ

---

2) 本稿では, すべての事例において, 省略された目的語を「Ø」で表す。

3) 本稿で使用する作例は, 3名の英語母語話者（アメリカ英語2名, イギリス英語1名）に容認性を確認したものである。なお, 4.1節の一部の事例（（30）（31）（34））の容認性に関しては, 上記3名を含む合計7名の調査結果を反映している（4.1節を参照）。

れまで指摘されてこなかった。

本稿では,（４）の事実に関する次の２つの問いに答えることを目的とする。(i) 談話的な要因により, 被動作主目的語の省略が可能となる仕組みは何か,（ii）談話的な要因が与えられた場合に, 目的語省略が容認されるタイプと容認されないタイプの結果構文を分ける条件は何か。

本稿の構成は, 以下の通りである。２節では, まず目的語省略全般の先行研究を概観した上で, 状態変化他動詞の目的語省略を中心に扱ったGoldberg（2001, 2005）の分析を概観し, その問題点を指摘する。3節では, 代案となる状態変化他動詞の目的語省略の認可条件を提案する。４節で, 本稿の分析が, 結果構文の目的語省略にも適用できることを示すと共に, 文脈が与えられても容認されにくい事例に対し, 語彙意味論的観点からの説明を行う。最後に, 5節で本稿の結論と今後の課題を述べる。

２．先行研究

結果構文における目的語省略を考察するにあたり, 本節ではまず目的語省略という現象一般に関する先行研究の見解, および状態変化他動詞の目的語省略の事例を考察した先行研究を概観する。

2.1. 英語の目的語省略

一般に, 目的語の省略が容認されるためには, 省略される目的語の解釈が何を指すか, 先行文脈や, 発話の場面（situation）などの言語外的文脈から理解できなければならないとされてきた。これは, 復元可能性（recoverability）の条件とも呼ばれる（e.g., Fellbaum and Kegl（1989: 94）, Brisson（1994: 90））。つまり, 省略するためには,「言わなくても分かる」ということが必要ということである。

この復元可能性の条件以外でどのような条件が必要となるのかについては, 言語によって異なる。Li and Thomspon（1981）や Huang（1984）で述べられているように, 日本語や韓国語, 中国語においては, 省略の対象となる動詞の項が先行文脈で話題として理解され, 文脈から復元可能であるなら, 省略が容認される。

（５）　a.　（食卓の塩を指さして）
　　Ø 取って。
　　b.　A: 太郎が花瓶を壊したよ。
　　B: どうしてØ壊したの？

一方で, 英語では復元可能性の条件が満たされたとしても, 多くの場合省略が許されない。特

に, 状態変化他動詞の目的語を省略することは非常に難しい。

（6） * Did you lock Ø? （Fillmore（1986: 98））

（6）は, あるドアに鍵を掛けたかどうかを尋ねる発話である。話し手も聞き手も, どのドアを指しているのか了解している場面であったとしても,（6）のように目的語を省略した発話を行うことはできないとされている（Fillmore（1986））。

Huang（1984）は, 談話で話題となっていれば省略が可能な日本語, 中国語, 韓国語のような言語を「談話指向型言語（discourse-oriented language）」, そうではない英語やフランス語のような言語を「センテンス指向型言語（sentence-oriented language）」と呼んで区別した。つまり, 英語は日本語と異なり, 文脈から復元できたとしても, 目的語省略が容認されない。これは, 個別言語の体系的な違いとして捉えられてきた。しかし, 省略を一般に容認しにくい英語であっても, 実は（7）のように省略を許す動詞も存在する（Fillmore（1986: 99）; Huddleston and Pullum（2002: 301）も参照）。

（7） a. I {tried/protested/objected} Ø.
b. They {accepted/approved/concurred/agreed} Ø.

このため, 英語における目的語省略を説明するためには, センテンス指向性という特徴以外の別の説明が必要となる。

Fillmore（1986）は, 英語の目的語省略を説明するためには, 復元可能性のような語用論的条件以外に,「動詞ごとに省略の可否が個別に指定される」という語彙的条件も必要であると結論づけた。これは, 目的語省略の可能な動詞群に対して, 意味的一般化を立てることは不可能だと述べることに他ならない。結果として, Fillmoreは, 目的語省略が可能な動詞を非網羅的に列挙している。但し, その中で唯一の意味的一般化を提案しているのが, 状態変化他動詞である。状態変化他動詞の目的語すなわち被動作主であれば, 省略することはできないと述べている。しかし, なぜこの意味的特徴を共有する動詞群が省略を許さないのかについては, 説明を与えていない（Fillmore（1986 : 104））。

2.2. 状態変化他動詞の目的語省略と文脈

Fillmore（1986）以降, 英語の状態変化他動詞の目的語は省略できないという見解は, 多くの研究者に共有されてきた（Grimshaw and Vikner（1993）, Brisson（1994）, Rappaport Hovav and Levin（1998）など）。しかし, Goldberg（2001, 2005）やMittwoch（2005）において, 適切な使用の環境が整えば, 状態変化他動詞であっても目的語省略が可能であると指摘された。

（8）　a.　Tigers only kill Ø at night.　（Goldberg（2001: 506））

b.　The singer always aimed to {dazzle/please/disappoint/impress/charm} Ø.　（*ibid.*）

c.　[International tribunals] are valuable, she argues, because when they punish criminals, they also affirm Ø, condemn Ø, purge Ø, and purify Ø.　（Mittowoch（2005: 248））

特定の使用文脈において状態変化他動詞の目的語が省略できるという（8）のような事実に対し, Goldberg（2001, 2005）は, 談話の際立ち（discourse prominence）の観点から, 次のような原理を提案している。

（9）　*A Principle of Omission under Low Discourse Prominence*:
Omission of the patient argument is possible when the patient argument is construed to be deemphasized in the discourse vis-a-vis the action. That is, omission is possible when the patient argument is not topical（or focal）in the discourse, and the action is particularly emphasized（via repetition, strong affective stance, discourse topicality, contrastive focus, etc.）.　（Goldberg（2001: 514）, 下線は執筆者）

以下では, このGoldbergによる提案の内容を概観する。

（9）の原理は, 以下の2つの下位条件に分けて考えることができる。（10a）の情報構造に関する条件と,（10b）の事象構造（event structure）と文脈に関する条件である。

（10）　a.　被動作主項は, 話題でも焦点でもない。

b.　動詞が表す行為が, 文脈上強調されていると解釈される。

まず,（10a）について見てみよう。（10a）では, 状態変化他動詞の目的語が省略される際には, 談話の話題（topic）であってはならないことを規定している。例えば,（11a）の代名詞Theyは, 先行文脈で省略されたkillの目的語を指すことができない。これは, 省略された目的語が, 談話の話題になれないことを示している。また,（11b）のように, What happened to ... ? 形式によってthat gazelleが会話の話題として明らかな場合も, これを指す目的語を省略することはできない。

（11）　a.　Tigers only kill Ø at night.　*They are easily caught at that time.

b.　A:　What happened to that gazelle?

B:　The tiger killed *（it）.

（Goldberg（2001: 511-512））

加えて, 省略される目的語は, 談話における新情報, すなわち, 焦点（focus）にもなれない。（12）ではanimalsとpeopleが対比されており, この場合,（12a）のように, 焦点であることを示す音調上の強勢が置かれる。この時, 焦点要素である目的語を省略できない（12b）。

（12） a. Dr. Doolittle aimed to dazzle animals; he didn't care if he dazzled PEOPLE.

b. Dr. Doolittle aimed to dazzle animals; he didn't care if he dazzled *（people）.

（Goldberg（2001: 511））

次に,（10b）の条件を考察する。この条件は, 状態変化他動詞の意味的特性, 特に出来事の構造に関する特性を前提としている。まず, 状態変化他動詞が表すのは, 動作主によって被動作主の状態が変化するという出来事である。これは,（13）のように（i）動作主による行為,（ii）被動作主の状態の変化, 及び（iii）その変化後の結果状態, という意味要素から構成されると分析されてきた（e.g., Dowty（1979））。

（13） [x act] cause [y become z] （x: 動作主, y: 被動作主, z: 結果状態）

Goldberg（2001, 2005）はこの意味的特徴を踏まえた上で, 状態変化他動詞の目的語が省略できない理由を,「その参与者の状態が変化することを断定することで, 話し手は参与者に関して議論したり, 注意を促したりすることになり, 談話上の際立ちが高まる」ためだと主張する[4]。つまり, 状態変化他動詞の語彙的意味の性質上,（13）の [y become z] の部分が談話において際立つため, その変化の受け手を表すyは, 目的語として必ず言語化されなければならない, というのである。この考えを受け, 本稿でも,（13）の状態変化 [y become z] の際立ちにより, 被動作主目的語が省略できないと仮定する。

逆に, [y become z] よりも, [x act] という行為の部分が際立つ場合, 目的語省略が可能であるとGoldbergは主張する。一般的に, いかなる文あるいは発話も, 何らかの新情報を含まなければならない（cf. Lambrecht（1994: 206））。従って, 行為が新情報, つまり談話上際立つのであれば, 状態変化, 及びその担い手である被動作主は脱焦点化（de-focused）して目的語が省略できるとGoldbergは考える。

状態変化よりも行為が際立つ条件として, Goldbergは, 動詞の表す出来事が反復されること（14）, 話者の感情的な態度を伴うこと（15）, 談話上話題となっていること（16）, 対比的焦点となること（17）, といった文脈上の条件を指摘する。

---

[4] 該当する箇所を以下に引用する（Goldberg（2001: 510）, 下線は執筆者）。

（i） "Normally, the patient argument of a causative verb is quite prominent in the discourse; one typically does not assert that a participant changes state unless one wishes to discuss or draw attention to that participant. Therefore patient arguments of causative verbs typically need to be expressed."

（14）　a.　Tigers only kill Ø at night.　（=（8a））

b.　The singer always aimed to {dazzle/please/disappoint/impress/charm} Ø.　（=（8b））

（15）　Why would they give this creep a light prison term!? He murdered Ø!

（Goldberg（2001: 513））

（16）　A:　When do these animals hunt?

B:　Beavers kill Ø during the day, but tigers only kill Ø at night.（Goldberg（2001: 513））

（17）　A:　Let's get all of these ugly dishes out of here before your date arrives.

B:　OK, you *break* Ø and I'll sweep Ø.

C:　You *wash* Ø, I'll *dry* Ø.　（=（2））

これらの事例において, 状態変化を引き起こす行為が談話上「強調」されており, 従って目的語の際立ちが減少して省略が可能となると, Goldbergは主張する。

以上,（9）に示したGoldberg（2001, 2005）の分析を考察してきた。繰り返しになるが, 状態変化他動詞の目的語省略は,（i）情報構造上の制約と（ii）事象構造と文脈の相互作用による「談話上の際立ち」に関する制約という, 2つの制約に基づいて成立することになる。この提案は, これまでの先行研究で見過ごされてきた当該現象の様々な特性を明らかにした。加えて, 動詞の目的語の生起に関する形式的な現象を, 意味・語用論的な側面から分析したことで, 記述的貢献だけでなく理論的な示唆に富む提案だと言える。

しかし, この提案には解決すべき問題がある。まず,（10b）の「行為が談話文脈で際立つ」という条件には疑問の余地がある。（14）のkill,（17）のbreak, そして以下のcreateやdestroyのような動詞も, 行為が語彙的に指定されていないにも関わらず, 適切な文脈では目的語省略が容認される。

（18）　This one creates Ø, that one destroys Ø.　（Mittwoch（2005: 252））

例えば, John broke the vaseという文は, Johnが花瓶を叩いて壊しても, 落として壊しても, 花瓶が壊れさえしていれば, 使用することができる。状態変化他動詞は, 語彙的に変化や結果状態を指定するためその部分が際立つと考えるのであれば, 語彙的に指定されていない行為が際立つと捉えて良いのか, 疑問が生じる。

さらに, Goldbergの状態変化他動詞に関する説明では, 結果構文の事例を完全に説明することができない。例えば, 構文の意味的特性との相関が説明すべき問題となる。Boas（2003: 145）も述べているように, 結果構文は, 構文を構成する結果句（resultative phrase）によって結果状態が強調される。この構文的特徴は, 行為の際立ちという特性とは相容れないはずである。実際, 習慣文で尚且つ対比的文脈であっても（19）, 進行形による行為が強調されていても（20）,

結果が強調されることで省略が容認されなくなる。

(19) a. He only breaks Ø, he never fixes Ø. (Mittwoch (2005: 252))
b. * He only breaks Ø *into pieces*, he never fixes Ø.
(20) a. He is eating Ø.
b. * He is eating Ø *up*.
(Quirk et al. (1985: 595))

しかし，1 節で見たように，結果構文であっても適切な談話文脈において目的語省略が可能となる。文脈が状態変化を脱焦点化する役割を果たしていることを踏まえた上で，それが実際にどのようなメカニズムで行われているのか，より詳細に検討する必要がある。

そして，結果構文間の省略可能性の差異についても，さらなる説明が必要となる。

(4) a. (When cleaning a room) you sweep Ø clean, and I wipe Ø clean.
b. * Bird: Oh my, she won't wake up by any means.
Dog: Well, don't give up. You bite Ø awake, and I bark Ø awake.

(4) は対比的な文脈である。(17) と同様の文脈を設定しても，結果構文には容認不可能なものが存在することを説明しなければならない。

以上の点を簡潔にまとめると，結果構文の目的語省略を説明するためには，(i)「行為の際立ち」という規定の再考，そして，(ii) 文脈が与えられても容認されない結果構文の考察を行わなければならない。これらの問題を解決し，結果構文の事例を説明するために，以下では次の問題に答えることを目標とする。

問 1： 談話的な要因により被動作主目的語の省略が可能となる条件は何か。
問 2： 談話的な要因が与えられた場合に，目的語省略が容認されるタイプと容認されないタイプの結果構文を分ける特徴は何か。

3．目的語省略の認可条件と文脈のタイプ

本節では，被動作主目的語の省略を可能にする条件を意味・語用論的な観点から再考する。Goldberg (2001, 2005) の問題点を踏まえ，状態変化他動詞の目的語省略に対して果たす役割に応じて文脈を 2 つのタイプに分け，省略を可能にする要因を明らかにする。

3.1. 目的語省略と無時間性

これまでの先行研究で, 被動作主目的語の省略が可能な文脈として, 様々な事例が指摘されてきた。その代表格と言えるのが, 反復や習慣, 総称性を示す文脈である（e.g., Fellbaum and Kegle（1989）, Cote（1996）, Goldberg（2001, 2005）, Mittwoch（2005））。該当する例を以下に再掲する。

（21） a. Tigers only kill Ø at night.
b. The singer always aimed to {dazzle/please/disappoint/impress/charm} Ø.
c. [International tribunals] are valuable, she argues, because when they punish criminals, they also affirm Ø, condemn Ø, purge Ø, and purify Ø.

この種の文脈では, ある出来事が複数回繰り返されることが含意される。Goldberg（2001, 2005）は, この意味により, 行為が談話上強調されるため, 状態変化が脱焦点化し, 省略できると主張する。しかし, 2.2節で述べたように, killのような動詞において, 語彙的に指定されていない行為が際立つと考えていいものか疑問が生じる。行為が際立つからというよりも, むしろ, 状態変化自体が適切に脱焦点化できていることが重要であると考えなければならない。

状態変化事象の脱焦点化が鍵となることは,（22）からも分かる。総称的文脈によって状態変化他動詞の目的語省略が可能な事例（22a）に,（22b）のように結果句を生起させると, 容認されなくなる。一方で,（22c）のように様態の副詞句の場合には省略が容認される。

（22） a. This gadget shreds, and chops.
b. This gadget shreds, and chops *（any vegetables）*into pieces*.
c. This gadget shreds, and chops（any vegetables）*very smoothly*.

この事実は, 結果状態の焦点化の違いで説明される。（22b）の結果句の生起が,（13）で言う結果状態zに際立ちを与えてしまっているため, 文脈があっても目的語省略が容認されない。これに対し,（22c）の様態の副詞句は結果状態に際立ちを与えないため, 文脈によって [y become z] が脱焦点化できるので, 省略が適格となるのである。それでは,（21）のように出来事が反復される解釈が起こると, なぜ状態変化が脱焦点化されるのだろうか。

ここで, Mittwoch（2005）の分析が興味深い。それによれば, 反復や習慣, 総称を表す文脈では, 不特定数の事象に対して一般化がなされ, それによって, 省略される目的語が量化されず, 不特定の数の事物として解釈されるとしている。例えば,（21a）は「トラが獲物を夜殺す」という個別の事象が複数回生じることが含意され, それを一般化した言明を行っている。これにより, 省略された目的語である「獲物」も不特定数の物として解釈される。

このように複数の事象を一般化すると 主語に関する特性を記述することになる（Krifka et al.（1995）など)。(21a）はトラ，(b）は特定の歌手，(c）は国際法廷について，何らかの特徴が言及されている。この主語の特性を記述する性質により，表す出来事は未完了となり，より無時間的（atemporal）な性質を帯びるようになる。この点が，一度きりの単発的な出来事（episodic event）と大きく違う点である。本稿では，反復，習慣，総称を表す文のもつ，この未完了性・無時間性が目的語省略の可能性に大きく影響を及ぼしていると仮定する。

この仮定の妥当性を示す証拠が 2 つある。まず一つは通言語的な事実である。世界の言語の中には，英語のような目的語省略を，態の交替として文法体系の中にもつ言語がある。これは，逆受動態（antipassive）と呼ばれ，能格型の言語に多く見られる態の一種である。逆受動では，他動詞主語を絶対格，目的語を省略あるいは斜格化する。加えて，名詞句を目的語から降格し動作主の際立ちを高める働きをする（Cooreman（1994），Givón（2001），Polinsky（in press））。(23）のUte語の例では，(23a）のkillの目的語が，(23b）では接辞として動詞に編入され，自動詞文として成立している。

(23）	a.	ta'wach	'u	kwanach-i	'uway	pakhá-pʉga
		man/SUBJ	DEF/SUBJ	eagle-OBJ/AN	DEF/OBJ	kill-REM
		'The man killed the eagle.'				
	b.	ta'wach	'u	kwana-pakhá-pʉga		
		man/SUBJ	DEF/SUBJ	eagle-kill-HAB		
		'The man killed eagles.' / 'The man did some eagle-killing.'				
						(Givón（1980），cited from Givón（2001: 169-170）)

ここで注目したいのは，(23b）で逆受動態を表す標識として使われているのが，習慣相を表す接辞という事実である。Polinsky（in press）などによれば，一般的な傾向として，逆受動態と習慣・総称の未完了相には一定の相関関係があるという。Ute語の逆受動態のように確立された文法形式として存在してはいないものの，英語に見られる目的語省略と未完了相との相関関係は，他の言語とも共通しているのである。このことは，目的語省略に未完了性・無時間性が重要な役割を果たすという本稿の考えを支持するものである。

未完了性・無時間性の分析を支持する 2 つ目の証拠として，名詞化に関する事実が挙げられる。名詞化することでも，状態変化他動詞の目的語は省略可能となる[5)]。

5) Grimshaw（1990）が指摘しているように，名詞化でも動詞の事象構造に関する特性が保持されることがあり，その場合には内項が省略できない。(i) の「木の伐採」や「街の破壊」という事例では，動詞が表す事象の内部構造が保持されているため，(ii) の基体動詞と同様に目的語が省略できない（Grimshaw（1990: 50））。

(i) a. The felling *(of the trees)
b. The destroying *(of the city)

(ii) a. They felled *(trees).
b. They destroyed *(the city).

（24）　a.　The *killing* Ø is instantaneous — with practice.　（BNC BNY）

b.　Insulting Ø is the causing of an injury, impregnating Ø is the causing of a pregnancy and *destroying* Ø is the causing of a destruction — a causing, not a cause.

（Ralf Stoecker, *Reflecting Davidson*, p.282）

名詞化も, 時間性をもった動詞を無時間的かつ未完了的にするとされる（Langacker（1991）など）。（24）のように状態変化他動詞 kill や destroy でも, -ing 名詞として生起すると, 内項（internal argument）, すなわち目的語にあたる名詞句の生起が義務的ではなくなる。

以上の議論をまとめると, 先行研究で指摘されてきた, 反復, 習慣, 総称を表す文脈で状態変化他動詞の目的語省略が容認されやすいという事実は, 動詞が表す出来事が, そうした言語的環境において, 未完了性・無時間的特性をもつことが原因であると説明できる。

この主張を踏まえると, それではなぜこうした性質をもつと目的語の省略が容認されやすくなるのかという疑問が生じる。本稿では, この問いに対する明確な説明を与えることはできないが, 次の仮説を試論として提案したい。まず, 状態変化他動詞の目的語省略が文脈なしで容認されにくいのは, Goldberg（2001, 2005）の議論や（22）の事実が示すように, 被動作主が意味的に際立つという, 状態変化事象固有の特性である。この特性は, 動詞の事象の内部構造に関係し, 一度きりの単発的な事象として解釈される時に顕著となる。しかし, Mittwoch（2005）が正しく指摘するように, 反復, 習慣, 総称の文脈では事象が複数回発生することが含意されるため, 個別の状態変化の際立ちが背景化されると考えられる。この結果として, 被動作主が脱焦点化できるのである。

3.2. 状態変化を引き起すことへの焦点

ここまで, 被動作主目的語の省略が可能となる反復, 習慣, 総称を表す文脈が, Goldberg（2001, 2005）の主張する「行為の際立ち」によるのではなく, 複数の事象を一般化し無時間的性質をもつことで省略が可能となるという分析を提示した。しかし, 当該現象をさらに考察すると, この無時間性でも説明できない事例に直面する。（25）のような事例は, 反復, 習慣, 総称的な文脈ではないにも関わらず, 状態変化他動詞の目的語が省略されている。

（i）の非文法性は, 動詞が表す事象の特性がその名詞形に継承され, その時間的な特性も保持されるためである。しかし,（iiia）のように総称的解釈が可能なら, 内項の生起は義務的ではない（Mittwoch（2005））。

（iii）a.　Indiscriminate felling Ø is harmful to the environment.　（Mittwoch（2005: 254））

b.　（situation: the felling of trees is the topic of the conversation）

They fell Ø indiscriminately.　（Mittwoch（2005: 250））

（iiia）は, indiscriminate fellingの一般的特性を述べた属性記述文であり, 時間軸上のある一時点に関連付けられていないため, 内項が省略できる。これは,（iiib）の習慣文における動詞の目的語省略と並行的である。

このように, 名詞化には, 動詞が表す事象の特性を継承して時間的な特性が保持される場合（出来事的解釈）と, そうではなく無時間的解釈を受ける場合（非出来事的解釈）の 2 種類が存在し, 後者の場合には内項が省略できる。これは, 時間性の有無と目的語省略の可否を結びつける本稿のアプローチを支持している。

(25) a. Why would they give this creep a light prison term!? He murdered Ø! (=(15))

b. A: Let's get all of these ugly dishes out of here before your date arrives.

B: OK, you break Ø and I'll sweep Ø.

C: You wash Ø, I'll dry Ø. (=(2))

c. They murdered, raped, and plundered Ø. (Mittowoch(2005: 248))

d. She lived for love, she died a thousand symbolic deaths for love, and she *killed Ø for love*.

(Joan Schenkar, *The Talented Miss Highsmith*, p. 29)

いずれの例でも出来事が複数回起こる含意はなく, 一度きりの単発的な事象を表している。

(25) の事例をみると, 状態変化を引き起こすこと自体に焦点が当てられていると考えられる。例えば (25a) では, 主語が「殺害」という出来事を引き起こしたことが問題となっている。実際, 当該発話は, 次のように書き換えることができる。

(26) ... He murdered Ø! (=(25a))

= He committed a murder.

また,(27) の事例では, do-support によって, 動詞が表す出来事を行ったことを強調されている。ここでもやはり, 意味的な焦点は状態変化を引き起こすことにある。

(27) a. Belote *did kill* Ø in the manner and forcibly by the means aforesaid.

(Charles Vaughan, *Grant Me to Live*, p.34)

b. ... they *did kill* Ø for the pleasure of knowing an American life is saved with each enemy dead. (Michael D. Guard, *In the Sanctity of the Snake Pit*, p. 249)

さらに, What happened? の返答として適格となることからも, Danny が「殺人」という出来事を引き起こしたことが焦点となっていることが分かる。

(28) (At midnight, suddenly the phone rang.)

Katie: Hello? Yes ... Yes ... NO! ... Okay, I'll come.

Oh! ... my ... Matt! Matt!! (sobbing)

Matt: *What happened*!?

Katie: *Our son… Danny… m, m, murdered* Ø!

以上のように,（25）のような目的語省略は, 状態変化を引き起すことが焦点となっている事例であると言える。すなわち,（13）で言うところのcauseに際立ちが与えられると考えられる。これによって, 相対的に状態変化 [y become z] が背景化されるため, 被動作主の脱焦点化が起こり, 目的語が省略できるのである。これを図式化すると, 次のように表すことができる（太字は談話上の際立ち, すなわち焦点となる部分）。

（29）　[x act] cause [**y become z**] ⇒ [x act] **cause** [y become z]

この図式が表すのは, 状態変化という事象から, それを引き起す使役自体への焦点のシフトである。状態変化他動詞の表す出来事は, 無標の場合には被動作主の状態変化が際立つが,（25）のような文脈があると, 状態変化を引き起こすこと自体に際立ちが与えられ, 結果として状態変化の脱焦点化が起こるのだと考えられる[6)]。

本節での考察から, 2.2節で挙げた問 1 に対して, 次のように答えることができる。

問 1 :　談話的な要因により被動作主目的語の省略が可能となる条件は何か。

答え :　表す出来事が未完了的・無時間的と解釈されるか, 状態変化を引き起すことに際立ちが与えられることで容認可能となる。

4. 結果構文の目的語省略

次に, 3 節での状態変化他動詞の考察を踏まえ, 結果構文の目的語省略について考察する。現在までの調査の限り, British National CorpusやCorpus of Contemporary American Englishなどの大規模コーパスにおいて, 結果構文の目的語省略の事例を見つけることは, 他動詞の場合に比べて, かなり困難であると言ってよい。加えて, 英語母語話者によるインフォーマント調査でも, 結果構文の目的語省略は状態変化他動詞の場合よりも容認されにくい印象を受ける。これは, 状態変化他動詞でさえ目的語の省略が容認されにくいにも関わらず, 結果構文はさらにその結果状態を言語化した構文形式であるため, 構文的特性として動詞よりも状態変化に際立ちを与えるからだと考えられる。

実例を収集しにくいという状況を踏まえ, 複数の母語話者に作例によるインフォーマント調査を行い, 他動詞で容認される談話文脈における振舞いを考察することにした。

---

6) 事象構造に関する分析では, 行為または結果状態のどちらかに焦点があるとする分析が多い（例えば, Rappaport and Levin（1998）など）。causeに際立ちがあるとする本稿の分析の概念的, 理論的妥当性は紙幅の都合上, 今後の検討課題としたい。

4.1. 調査

アメリカ, イギリス, オーストラリア, ニュージーランド国籍を含む10代から50代の英語母語話者 7 名に, 以下の英文の容認性を 4 段階（ 4 を最も自然, 1 が最も不自然）で評価してもらった。

（30） a. Cinderella *swept* Ø *clean* then. [1.2]

b. Cinderella *sweeps* Ø *clean* every morning. [2.3]

c. Cinderella is *sweeping* Ø *clean* in the morning. [2.3]

（31） （When cleaning a room）You *sweep* Ø *clean*, and I *wipe* Ø *clean*. [2.7]

結果として, 上で見たタイプの文脈が関与しない単純過去時制の（30a）と, 習慣文や現在進行形の（30b, c）の間には差が見られた。また,（31）の対比的な文脈においては, その差はさらに大きく, 最も容認されやすいという結果が得られた[7)]。この事実は, Mittwoch（2005）の観察とも合致する。Mittwoch も内省判断から, 対比的な文脈が最も目的語省略が容認されやすく, break のような典型的な状態変化他動詞であっても, 対比文脈では容認されると述べている。

文脈毎になぜこのような違いがあるのか, 特になぜ対比的な文脈が最も容認されやすいのか, という点については今後明らかにしなければならない課題である。しかし, この調査によって, 他動詞と同じような環境で結果構文の目的語省略が容認されること, 文脈の種類によって, 幾分かの違いが存在することが明らかとなった。これは, 文脈のタイプによって異なる要因が関わるとする本論の主張を支持してもいる。

また, 状態変化他動詞と同様の条件で, 結果構文の目的語省略が可能となることも分かる。（24）の状態変化他動詞の場合と同様に, 結果構文においても名詞化によって目的語が省略されている事例がある。斜字体の箇所に注目されたい。

（32） a. ... let us continue to be concerned about corruption, but let us recognize that it's not locking people up or *shooting* Ø *dead*, ... （COCA NPR_ATC）

b. Decorative uses of forging include the use of stamps or punches, hammering of thin metal sheet（often gold）into or over patterns and chasing. *Hammering* Ø *into or over patterns* is not noted so far, but simple circular punch marks were used in the decoration of gold objects and fillets ...

7) 英語母語話者にとって, 被動作主目的語の省略現象は， 最も容認しやすいとされる事例でも, 状態変化他動詞であれ結果構文であれ， 多少の違和感を感じられるようである。実際, 先行研究で容認可能とされる事例でも, 4段階中3の評価を与えられることが多かった。母語話者の直感としては, 被動作主目的語は必ず言語化すべきものであり, その省略は文脈により容認しやすくなることはあっても, 目的語を明示化した例に比べると, 多少の物足りなさや違和感を感じるようである。このためか, 目的語を省略しない場合を基準（最高の4の評価）とし, それに基づいて省略の事例を判断する傾向がうかがえた。これは, Huang（1984）の言う通り, 個別言語の文法体系として, 英語が基本的には目的語省略を容認しにくいことが原因だと考えられる。

（Vincent C. Pigott, *The Archaeometallurgy of the Asian Old World*）

例えば（32a）では, corruption「汚職」という犯罪を考察し, そのことがlocking people up「人の監禁」やshooting ... dead「銃殺」という出来事一般とは異なることが述べられている。この例も, 名詞化によって, 表す出来事が特定の時間軸上に位置づけられておらず, 従って無時間的性質を有しているため, 省略が可能となるのである。

また,（31）に加えて, 以下の容認性からも, 対比的な文脈で状態変化を引き起すことに際立ちが与えられると, 目的語省略が認可されることが分かる。

（33）　a.　There are many ways to collect newspaper clippings. Some people *cut* Ø *out*, while others *tear* Ø *out*.

b.　Now, let's cut this scrap metal into several pieces. You *hammer* Ø *flat*, and I'll *cut* Ø *into pieces*. OK?

（33）は 2 組の動詞＋結果句が対比されている文脈であるが,（a）のように結果句が同じであっても,（b）のように結果句が異なっていても, 目的語の省略が可能となることは注目に値する。3.2節での事例と同様, 行為よりも状態変化を引き起すことが際立つため, 目的語が省略できるのだと説明できる。

以上のように, 結果構文の目的語省略は, 他動詞の場合に比べて用例の数はかなり少ないものの, 同様の認可条件によって容認されていると言うことができる。しかし, この一方で, 1 節でも述べたように, 対比的な文脈であっても容認されない事例が存在した。7 名のインフォーマントによる判断は, 以下の通りである。

（34）　a.　（A dog and a bird were trying to wake up Sleeping Beauty）
Bird: Oh my, she won't wake up by any means.
Dog: Well, don't give up. You *bite* Ø *awake*, and I *bark* Ø *awake*.　[1.5]

b.　Really? Mary's cookies taste so terrible that they even make John feel down. He is really a tough guy isn't he? If John *eats* Ø *sick*, I should *eat* Ø *senseless*.　[1.4]

（a）bite ... awake と bark ... awake や,（b）eat ... sick や eat ... senseless は, 最も容認性が高いはずの対比的文脈であっても, 容認性の平均が1.5や1.4に過ぎず,（31）のような容認可能な事例と比べると大きな差がある。次節で, この事例が存在する理由について考察する。

4.2. 結果構文の特性と省略可能性

本節では,（34）のような容認不可能とされる結果構文の目的語省略の事例が存在する理由を考察し, 2.2節で挙げた「談話的な要因が与えられた場合に, 目的語省略が容認されるタイプと容認されないタイプの結果構文を分ける特徴は何か」という問いに答えたい。ここで, もう一度容認可能なタイプを考察してみよう。該当する例を以下に再掲する。

（35） a. （When cleaning a room）you *sweep* Ø *clean*, and I *wipe* Ø *clean*.

b. There are many ways to collect newspaper clippings. Some people *cut* Ø *out*, while others *tear* Ø *out*.

c. Now, let's cut this scrap metal into several pieces. You *hammer* Ø *flat*, and I'll *cut* Ø *into pieces*. OK?

（34）と（35）を見比べてみて, その違いをもたらす要因としてまず考えられるのは, 動詞の統語的特性である。省略される目的語が動詞によって選択されているのか, または構文によって認可される擬似目的語（fake object）（Simpson（1983）; Goldberg（1995）も参照）であるのかという区別によって, 省略可能性が左右されるという仮説が立てられる。実際, 省略可能なタイプは, 次の対比が示すように, 動詞が選択するタイプの目的語である。

（36） a. John wiped the room.

b. * The dog barked him.

同様に, sing や shout のような自動詞が生起する結果構文も目的語省略が容認されないことから, この仮説は支持されるように思われる。

（37） a. * In Karaoke, John always *sings* Ø *hoarse*.

b. * Girlfriends kiss Ø awake, but wives *shout* Ø *awake*.

c. （The owner of a new baseball stadium says:）

* People come to this wonderful stadium, watch exciting games, eat and drink, *shout* Ø *hoarse* and go home smiling.

（37）のようなタイプの結果構文は, NP+V+NP+AP という形式に動詞からは予測できないような意味が結びついていて, その点でイディオム性の高い構文であると言える。これを踏まえれば, 擬似目的語を省略してしまうとその形式が損なわれ, 対応する解釈に問題が生じてしまうと考えることができる。丁度, kick the bucket の the bucket が省略できないのと同じである（e.g.,

*John kicked the bucked and Bill kicked Ø too）。

しかしながら,「目的語が動詞によって統語的に認可される目的語かどうか」という仮説にとって問題となる事例がある。knockの場合である。（38）は名詞化による省略の実例,（39）はインフォーマントによって容認されると判断された作例である。

（38）　Nothing is foreign to them that involves dealing blows, *knocking Ø senseless*, striking with quick jabs, breaking the nose, beating Ø black and blue, breaking arms and legs, tramping underfoot.　（James Douglas Davis, *Beautiful War*, pp. 129）

（39）　a.　You only have to lure the guy out of the street into this back alley. Then I'll smile and shake hands, lift up, give some punches and *knock Ø senseless*.

b.　John is the boxer who can *knock Ø senseless*.

動詞knockは, 以下のように, 名詞句を直接目的語として取ることができない。行為の対象を表す場合には, knock on/at ... のように前置詞の助けが必要となる。

（40）　*　John knocked the boxer.

このことから, 目的語が動詞によって統語的に選択されるかどうかという違いは, 省略可能性の説明には十分ではないことが分かる。

ここで代案として提案するのが,「省略される目的語が働きかけの対象として動詞の語彙的意味に含意されるかどうか」という条件である。以下の辞書の定義にも見られるように, knockの意味には, その行為を働きかける対象が含意される。具体的に言えば,「叩く」という行為は,「（何かに）何かを打ち付ける」というような対象とそれに働きかける動きによって規定されるであろう。

（41）　*knock*:　to hit <u>something</u> with a short quick action so that it moves or falls; to hit <u>someone</u> very hard　（*Longman Dictionary of Contemporary English*）

一方で, barkやshoutは何らかの対象に働きかけるというわけではない。「吠える相手」や「叫ぶ相手」は必ずしも想定する必要がなく, その意味で自己完結的な行為である。

（42）　a.　*bark*:　when a dog barks, it makes a short loud sound or series of sounds

b.　*shout*:　to say something very loudly

（*ibid.*）

目的語を含意するかどうかに関する,（41）（42）の動詞の意味的な違いは, 言語的な事実からも確認できる。knockは（43a）のように, ドアなどの特定の対象をノックしたことを否定することは出来ない。 従って, その行為には何らかの対象の存在が含意されていることが分かる。一方barkは,（43b）のように特定の吠える対象が含意されなくともよい。

（43） a. # John knocked, but he didn't knock on anything.

b. Fido barked, but he didn't barked at anything.

結果構文の目的語省略を決定づけているのが, 動詞の語彙的特性だとすれば, それは一体なぜだろうか。2.1節で述べたように, ある表現が省略された時には, 省略された要素が何らかの言語的・言語外的情報を手がかりに復元できなければならない。しかし, 英語は日本語とは異なり, 先行文脈などの談話的な情報だけを頼りに復元することができない。これまで考察してきたように, 英語においては状態変化の際立ちのような, 構文的特性が重要な役割を果たしているのである。

そうすると, 目的語が省略された結果構文が与えられた時に, 最も妥当な可能性としては, 聞き手が省略された目的語を, 先行文脈の情報に加え, 動詞と結果句の語彙的意味を元に復元しようとすることである。すなわち, 省略された目的語を復元するための手段として, 動詞の意味に含意される参与者の情報を基にするのである。例えば,（44a）が与えられた場合,「金属を裁断する」という状況と, hammer「叩く」またはcut「切る」という行為の対象となるもの, つまり, 働きかける対象となり得るものを基に, 省略された要素を補って解釈する。結果として, 復元される目的語は, hammerやcutの対象となりうるthis scrap metalが復元される。

（44） a. Now, let's cut this scrap metal into several pieces. You *hammer* Ø *flat*, and I'll *cut* Ø *into pieces*. OK?

b. * （A dog and a bird were trying to wake up Sleeping Beauty）
Bird: Oh my, she won't wake up by any means.
Dog: Well, don't give up. You *bite* Ø *awake*, and I *bark* Ø *awake*.

一方,（44b）では, barkが典型的に表す出来事の中に「吠える（その結果, 起こす）相手」が含まれておらず, 従って, たとえ「ある人物を起こす」という状況が明らかであっても, bark自体が何らかの対象を含意しないため, 談話的な情報と整合せず, bark+awakeという連鎖から目的語を復元できないと考えられる。

実際, 働きかけの対象として動詞の語彙的意味に含意されるかどうかという基準が有効であ

ることを示す事実として, 以下の対立が挙げられる。

(45)　a.　If you *eat* $Ø_1$ *up*, I'll drink $Ø_2$ up.　[$Ø_1$= 'meal']

　　b.　*　If John *eats* $Ø_1$ *sick*, I should *eat* $Ø_2$ *senseless*.　[$Ø_1$= 'himself', $Ø_2$= 'myself']

(a) の if 節内の eat...up は, 動詞が語彙的に選択する meal が省略されており, 容認可能である。一方 (b) の eat...sick や eat...senseless の省略された目的語は, 構文によって容認される擬似目的語であり, 動詞によって含意されるものではない。この事実から, 省略される目的語と動詞の意味的な関係性が, 結果構文における目的語省略の可否を分ける要因であると考えることができる。

以上の考察から, 問 2 に対する答えとして, 以下の主張が成立する。

問 2 :　談話的な要因が与えられた場合に, 目的語省略が容認されるタイプと容認されないタイプの結果構文を分ける特徴は何か。

答え :　目的語が働きかけの対象として動詞の語彙的意味に含意されるかどうか。

5. 結論

本稿では, 結果構文の目的語省略に関して, 意味・語用論的観点からその成立条件を考察してきた。本論の提案として, ①「表す出来事が未完了的・無時間的と解釈されるか, 状態変化を引き起すことに際立ちが与えられることで容認可能となる」という条件を提示し, それが結果構文の事例にも当てはまることを見た。さらに, 言語的文脈があっても容認されない事例を指摘した上で, このタイプの結果構文では, ②「目的語が働きかけの対象として動詞の語彙的意味に含意されるかどうか」という条件を提案した。

最後に, これらの提案が持つ帰結を述べておきたい。①の条件は,「被動作主目的語の省略一般」に関する条件であり, ②は「結果構文の目的語省略」に関する条件である。①の条件を満たしていても容認されない結果構文があるという本稿の観察から, 結果構文の目的語省略が可能となるためには, まず②の語彙意味論的条件を満たした上で, 次に①のより一般的な意味・語用論的条件を満たさなければならない, という順序関係が考えられる。つまり, 動詞の語彙意味に目的語が含意されることの方がより中核的な条件で, それを満たすことが前提となり, その上でアスペクトや事象の際立ちに関する意味・語用論的条件を満たすものだけが可能となるのである[8)]。これまでの先行研究でも, 目的語省略は複数の要因が関係する複雑な現象であることが度々指摘されてきたが, 本稿の提案は, そうした複数の要因の間に存在する優先順位を, 部分

8)　この点に関して, 査読者から貴重なご助言を賜った。心より感謝申し上げる。

的にではあるが, 明らかにするものである。

本稿での結論から, さらなる問題も生じる。まず, そもそもなぜ無時間的な解釈や状態変化を引き起すことに際立ちがあると, 目的語が省略できるのかという問題である。本稿で提示できたのは暫定的な仮説に過ぎず, さらなる考察と検証が必要であることは言うまでもない。英語という言語そのものが, なぜ目的語の省略を容認しにくいのか, また, なぜ日本語, 中国語, 韓国語のような談話指向の言語とは異なるのか, という, より根源的な問いも今後考察する必要がある。これに関連して, 英語は目的語省略を容認しにくいにも関わらず, 適切な文脈が与えられると容認可能性が上がるのはなぜか, その理由も検討しなければならない。これらの問題は, 今後の研究課題としたい。

参考文献

Boas, Hans C.（2003）*A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford.

Brisson, Christine（1994）"The Licensing of Unexpressed Objects in English Verbs," *Papers from the 28th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Vol. 1: The Main Session*, 90-102.

Cooreman, Anne（1994）"A Functional Typology of Antipassives," *Voice: Form and Function*, eds. by Barbara Fox and Paul Hopper , 49-88, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Cote, Sharon A.（1996）*Grammatical and Discourse Properties of Null Arguments in English*, PhD dissertation, University of Pennsylvania.

Dowty, David R.（1979）*Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.

Fellbaum, Christiane and Judy Kegl（1989）"Taxonomic Structures and Cross-Category Linking in the Lexicon," *Escol 1989*, 93-104.

Fillmore, Charles J.（1986）"Pragmatically Controlled Zero Anaphora," *Berkeley Linguistic Society* 12, 95-107.

Givón, Talmy（1980）*Ute Reference Grammar*, Ute Press, Ignacio, Colorado.

Givón, Talmy（2001）*Syntax, Volume II*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Goldberg, Adele E.（1995）*Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.

Goldberg, Adele E.（2001）"Patient Arguments of Causative Verbs Can Be Omitted: the Role of Information Structure in Argument Distribution," *Language Science* 23, 503-524.

Goldberg, Adele E.（2005）"Constructions, Lexical Semantics, and the Correspondence Principle: Accounting for Generalizations and Subregularities in the Realization of Arguments," *The Syntax of Aspect*, eds. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 215-236, Oxford University Press, Oxford, New York.

Grimshaw, Jane（1990）*Argument Structure*, MIT Press, Cambridge.

Grimshaw, Jane and Sten Vikner（1993）"Obligatory Adjuncts and the Structure of Events," *Knowledge and Language II: Lexical and Conceptual Structure*, eds. by Eric Reuland and Walter Abraham, 143-155, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Huang, C.-T. James（1984）"On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15-4, 531–74.

Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Krifka, Manfred, Francis Jeffry Pelletier, Gregory N. Carlson, Alice ter Meulen, Gennaro Chierchia, and Godehard Link（1995）"Genericity: An Introduction," *The Generic Book*, eds. by G. N. Carlson and F. J. Pelletier, 1-124, University of Chicago Press, Chicago.

Lambrecht, Knut（1994）*Information Structure and Sentence Form*, Cambridge University Press, Cambridge.

Langacker, Ronald（1991）*Foundations of Cognitive Grammar, Volume II*, Stanford University Press, Stanford, California.

Li, Charles and Sandra Thompson（1981）*Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*, University of California Press, Berkeley, California.

Mittwoch, Anita（2005）"Unspecified Arguments in Episodic and Habitual Sentences," *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*, eds. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 237-254, Oxford University Press, Oxford.

Polinsky, Maria（in press）"Antipassive," *Handbook of Ergativity*.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin（1998）"Building Verb Meanings," *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, eds. by Miriam Butt and Wilhelm Geuder, 97-134, CSLI Publications, Stanford, California.

Simpson, Jane（1983）"Resultatives," *Papers in Lexical-Functional Grammar*, eds. by Lori Levin et. al., 143-157, Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana.